

第36回目 新しい人を身に着る (8)

はじめに

●今回は、「新しい人を着る」というシリーズの第8回目で「光の子どもらしく歩みなさい。」のパートⅡです。使徒パウロは5章8節で、「あなたがたは、以前は暗やみでした。しかし今は、主にあって、光となりました。(だから)光の子ども(※)らしく歩みなさい。」と勧めています。以前は、あなたがたは暗やみそのもの、暗やみの中に生き、暗やみの性質を持って生きている者であった。「しかし今は、・・光となった」と宣言しています。つまり、光の中に生まれ、光の中に生き、しかも光の性質を持つ者となっただけでなく、暗やみを照らす者となったということです。それは主を信じるというかわりを持った(与えられた)ことによるのです。

※「〇〇の子ども」という表現はヘブル的慣用語です。それは「〇〇」にある性質を得る人々を表わします。パウロは「神の子ども」(ローマ8:14)「愛する私の子ども」(Iコリント4:14)「約束の子ども」(ローマ9:8)といった表現を使っています。エペソ書では「光の子ども」だけでなく、「不従順の子ら」(2:2)「御怒りを受けるべき子ら」(2:3)も同じ用法です。

●「暗やみと光」とは全く相反する世界です。全く性質の異なる世界です。暗闇の世界に生きていた者が、光の世界に招かれ、光の世界に生きる者となるということはどういうことでしょうか。

- ① 今まで見えていなかったものが、見えるようになった。
- ② 自分は見えているように思っていたが、実は見えていなかった。
- ③ 自分が正しいと思っていたことが、実はそうではなかった。
- ④ 自分のことはだれよりも自分が知っていると思っていたが、実はそうではなかった。
- ⑤ 自分に関心を持ってくれる神など、いないと思っていた。しかし実はそうではなかった。
誰よりも自分のことを愛してくれる神がいることがわかった。
- ⑥ 生まれながらにして障害をもって生まれてきたのは、自分の両親、あるいは自分の先祖のだれかが罪を犯したからだと思っていた。しかし実はそうではなかった。それは神のわざが、神の栄光があらわされるためであることを知った。
- ⑦ 自分の弱さを認めることは敗北に等しいと思っていた。しかし実はそうではなかった。
自分の弱さを認めることは、むしろ神の力によって強くされることであることを知った。

●これらのことは、闇の中にいる時には気づかなかったことが、まことの光であるイエシュアに出会うことによって気づかされた経験です。－これが「目から鱗が落ちる」経験です。光の子となるということはどういうことかです。しかもそれはひとえに、イエシュアにあって実現し得る神の奇蹟と言えます。イエシュアも言われました。

「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」(ヨハネ8:12)

●前回は、「いのちの光をもった」者が「光の子どもらしく歩む」一面を取り扱いました。それは特に、教会の中にあって光の子として歩むということはどういうことかということでした。ヨハネの手紙第一にこうあります。

אגרת שאול אל האפסים

「もし私たちが、神と交わりがあると言っているが、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行なってはいません。しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち・ます。」(Iヨハネ 1:6)

「光の中にいると言いながら、兄弟を憎んでいる者は、今もなおやみの中にいるのです。兄弟を愛する者は、光の中にとどまり、つまずくことはありません」(同、2章9～10節)

●要するに、「光の中にいるとは、主にある兄弟を愛すること」であり、「やみの中にいるとは、主にある兄弟を憎むこと」であるということです。このように、「光の子どもらしく歩みなさい。」という教えの第一弾は、教会の中に招かれた者たち同士が、さばきあうことなく、愛し合うことです。これまで多くの教会が神の律法によって自分たちの罪に気づくことなく、隔ての壁を作り、自分たちの聖書の立場はこうであるという、この解釈こそ正しいという壁を作りながら、さばきあい、憎みあってきました。ルカの福音書7章36～50節に登場するパリサイ人のシモンようになってはいけません(その箇所を確認してみよう!)。光の子どもらしく歩むとは、教会の中にあって互いに愛し合うことです。赦し合うことです。重荷を分かち合うことです。

4. 世を照らす光の子としての存在

●さて今回は、キリストのからだである教会内ではなく、教会外、すなわち世に対して、私たちが光の子として生きるとはどういうことを考えます。つまり、キリストのからだである教会—そこに招かれた私たちは、この世とどのようにかかわるべきかということでもあります。もう一度、聖書のテキストを読んでみましょう。

5:8 あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。

5:9 —光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです。—

5:10 そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。

5:11 実を結ばない暗やみのわざに仲間入りしないで、むしろ、それを明るみに出さなさい。

●「光」は、暗闇を照らす光源としてだけでなく、温かい熱をも与えます。冷たいものを溶かし、暖め、堅いものを柔らかくしていきます。世において、自分とかかわるものにそのような恵みを与えていく存在こそ、「光の子ども」と言えます。「光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです。」とあります。

語義的には、第二の「正義」(「ディカイオスナー」 δικαιοσύνη)は4章24節にある「義」と同義。第三の「真実」(「アレーセイア」 ἀλήθεια)は24節の「真理」、25節の「真実」と同義。そして第一の「善意」(「アガソースナー」 ἀγαθωσύνη)はパウロ独自の造語です。パウロの書簡にのみ使われています(ローマ 15:14/ガラテヤ 5:22/Ⅱテサロニケ 1:11)。「善意」は博愛慈善のような、この世での対人関係の善を表わすようです。ちなみに、光の世界での「善」は、10節にあるように、「主に喜ばれること」を意味します。ローマ 12章1～2節を参照。

●「善意と正義と真実」—これを言い換えるならば、親切な心、誠実な態度、思いやりの心と言ってもよいかと

思います。もてなしは、光の子としての大切な資質です。そのような心で私たちを招いて下さったキリストのように、私たちも、世において、自分とかわる人に対して、温かい心をもってかわるべきです。それは特に「もてなし」において現わされます。

(1) 今日求められるホスピタリティ・マインド(もてなしの精神)

●ホスピタリティ・マインドという言葉があります。「もてなしの心」という意味です。今日、最も元気のある企業は、このホスピタリティを志向した企業であると言われます。つまり、ホスピタリティ・マインドを持った人々からなる組織です。それは単に定められた命令系統にそって行動せず、臨機応変に変化する「形なき組織」であり、そこにはそれぞれ創造性と自主性が求められ、かつ生かされている組織です。しかも、そこに働く人々は互いに信頼し合い、強い連帯感を持っています。今や、こうしたホスピタリティ・マインドはビジネス界においては常識であり、これを有しない企業の明日はないと言われているほどです。つまり、人間性というものが大きな比重を占めているわけです。

●そうしたホスピタリティ・マインドが、今日のクリスチャンの中に、あるいは教会の中に欠けているような気がします。今、社会が求めている人間は、ホスピタリティ・マインドを持った人です。どんなお客様に対しても、「いらっしゃいませ」「ありがとうございました。」「次の方どうぞ」といったマニュアル化されたサービスは、コンピューターでもできます。ロボットでもできます。ですから、もっと血の通った人間性が求められているのです。これからの社会の動向として、これまでの「規模が大きいことは良いことだ」という量的な考え方から、「小さいことは良いことだ」という質的考え方—それはいつでも柔軟に対処できるから—へと移行しつつあります。

●人に夢と希望を与え、喜びと感動を与え、心地よさ、温かさを与えるホスピタリティ・マインドを持った人こそ、今回のテーマである「光の子ども」と言えないでしょうか。もっとも、そうした人材は一朝一夕にして育ちません。どのようにしてそうした人材を育てるかは、あとでお話することにして、光の子である私たちはもてなしの心を育てなくてはなりません。

●日本の茶道の本質はホスピタリティ・マインドです。今日、茶道という作法のうるさいイメージがあります。しかし、本来、お茶を立てるということは、もともとお茶を立てる人が飲む人をもてなし、そこによいかかわりを作ることが重要でした。たとえ初対面であったとしても、あたかも何年も付き合ってきたかのような温かいもてなしをする、そんな心こめたもてなしは、短期間の稽古ではできるものではないようです。ただお茶を飲むだけのように見えますが、お茶の世界を極めるには、何十年の期間を要しても、終わりのない道のりだと言われています。確かに、日本の茶道、華道のように、庶民の伝統文化の中で、何十年もの練習を必要とするものは、世界でもあまり類を見ないと言われます。茶道における「一期一会」とは、まさにそうしたライフスタイルそのもののなのです。

●ルカの福音書 4 章に、やがてイエシュアの弟子となるシモン・ペテロのしゅうとめが、ひどい熱病(一この熱病は、高熱と、脱水症状を引き起こし、死に至らせる風土病と言われてい—)で苦しんでいたという記事があ

ります。人々は彼女のためにイエシュアにお願いしました。するとイエシュアがわざわざ彼女の枕もとに来てくださり、熱を叱りつけました。すると、熱がひき、彼女はすぐに立ち上がって彼らをもてなし始めた」とあります。まわりの人が、彼女のためにイエシュアにお願いした人ではなく、シモンのしゅうとめ自身がイエシュアをもてなしたのです。この「もてなし」こそ、ホスピタリティ・マインドです。自分がイエシュアによって生かされた喜びを、「もてなし」という形で表現したのです。ここには自然さがあります。だれかに言われたかいらしたのではありません。自分から、自分の方法でもてなしたのです。そこにはなんの作法もありません。この「もてなしの精神」こそ、「主に仕える」という生き方の土台のような気がします。そしてそれが世に対するかかわりの土台でもあるような気がします。

●旧約において、このホスピタリティ・マインドの模範はアブラハムです。創世記 18 章 1～8 節にはアブラハムが三人の訪問者に対するもてなしを見ることができます。

●今日の教会のこの世に対するあり方も、単なる、伝道という働き、確かな実を得るための伝道という働き、神のビジネスに終始することなく、もてなしの心、ホスピタリティ・マインドを取り戻さなくてはならないと、常々、考えさせられています。しかし、この心を養うには、多くの時間がかかりそうです。クリスチャンの中にはそうした特別な賜物が与えられている人もいますが・・・。

(2) もてなしの精神を育てるには

●さて、もてなしの精神(ホスピタリティ・マインド)とはかかわりの精神です。それはどのようにして豊かに育つのでしょうか。エペソ 5 章 10 節を見てみましょう。「そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。」とパウロは述べています。キリスト者の歩みにとって、大切な基準は「主に喜ばれること」ということです。しかもそれを「見分け」なければなりません。経験としては、「主に喜ばれる」と思っていたことが、必ずしも「人に喜ばれず、かえって人に迷惑をかけたり、相手が快く思ってくれなかったり」ということがあります。

●確かに、「主に喜ばれることが何であるか」が光の子の生きる基準であることは間違いありませんが、それが実際の、具体的にどうということなのかは、様々な経験を通して「見分ける」という修練が必要のようです。「見分ける」ということばは「ドキマゾー」(δοκιμάζω)と言うのですが、「見分けることに神経質になってドキマギしてはいけません。」「ドキマゾー」は「精錬する」という意味です。いろいろ経験して、その中には失敗することも多くあります。ともかく多くの経験を通して、「主に喜ばれることが何か」を探っていくというのがこの「ドキマゾー」ということばです。この「見分ける」という修練は光の子とされた者たちの選択科目ではなく、必修科目です。

●特に、牧師は多くの失敗を通しながら、そのことを身につけていくようにされている者です。特に、「光の子どもは具体的にこうでなければならない」とすることは、一見、分かりやすく、迷わないように見えますが、主のみこころから遠いことが多くあるようです。律法主義は、分かりやすい、迷わない基準を自ら作ることで、安心しようします。そしてその安心を人にも押し付けてしまいやすいのです。ある規準に自分を合わせようと一

אגרת שאול אל האפסים

生懸命頑張りはしますが、真理に対する「柔軟性」というものを喪失してしまう危険をもっています。ここに律法主義の怖さがあります。しかも、そこに熱心であればあるほど、自ら考え、自ら経験し、自ら失敗して学ぶという道を自ら閉ざしてしまうこととなります。自分でものごとを考えなくなってしまいます。

●エホバの証人がそのよい例です。彼らは難しい問題になると自分で考え、答えを見つけ出す努力をせず、上の人を呼んでみます。彼らは上から教えられるだけで、自ら考えることをさせなくするカルト的な集団だと私は考えています。光の子どもの歩みの基準は、教科書的な、通り一遍の答えではなく、私たちの思索や生活体験の試行錯誤の中で、それぞれが、主体的に、主のみこころにそってふるい分け、答えを見出していくことを意味します。ここには、主体的な生き方、責任のある生き方、自由な生き方があります。ある面、危うさはありませんが、その危うさを通りながら、「神のみこころが何であるかを見分けて」いくようになると信じます。「そうした生き方が、結果的に」⇒「暗やみのわぎに仲間入りしないで、むしろ、それを明るみに出すこと」につながると信じます。「明るみに出す」とは、言葉にして、この世の間違いを正してやると考えるならば間違いです。悪や間違いを口に出して指摘して明るみに出すことだと考えるならば、ただつまずきとなるでしょう。

●「暗やみのわぎに仲間入りしない」で、身を退き、たもとを静かに分かちことも、「明るみに出す」ことにつながります。それぞれ、今、自分が最善と思われるところで答えを見つけつつ歩むことです。

(3) この世との様々なかかわりの領域において神の喜ばれることを見分ける

●「様々な領域の中でのかかわり」

- ① 仕事に対する考え方
- ② 職場の同僚とのかかわり方
- ③ 冠婚葬祭に対するかかわり方
- ④ 友人とのかかわり方
- ⑤ 聖日に対する考え方
- ⑥ 常識・因習・慣習へのかかわり方

●助言を求められるならば、決して押し付けることなく勧めるべきですし、逆に、いつも自分だけを信じて、人に決して頼らないという偏った構え方ではなく、人にも相談してみるという姿勢も必要だと思います。世とのかかわり、人とのかかわりは、ホスピタリティ・マインドが必要です。そこには柔軟性があります。相手の身になって考え、対応するという思いやりの心です。この心が私たちひとりひとりに成長していくように祈りたいと思います。

【新改訳改訂第3版】エペソ書5章8～14節

8 あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。

9 —光の結ぶ実、あらゆる善意と正義と真実なので—

10 そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。注1

11 実を結ばない暗やみのわざに仲間入りしないで、むしろ、それを明るみに出さなさい。注2

12 なぜなら、彼らがひそかに行っていることは、口にするのも恥ずかしいことだからです。

13 けれども、明るみに引き出されるものは、みな、光によって明らかにされます。注3

14 明らかにされたものはみな、光だからです。それで、こう言われています。

「眠っている人よ。目をさませ。死者の中から起き上がれ。そうすれば、キリストが、あなたを照らされる。」

注4

【岩波訳】エペソ書5章8～14節

8 あなたがたはかつて暗闇であったが、今は主にある光なのだから。あなたがたは光の子として歩み、

9—光の(もたらす)実あらゆる善、義、真実にあるのだから—

10 何が主の気に召すことなのかを吟味しなさい。注1

11 暗闇の不毛な行ないに加担せず、むしろ逆に、反駁してやりなさい。注2

12 彼らによって隠密になされていることは口にするのとさえ醜悪なのだから。

13 しかしすべてものは反駁されれば、光によってあらわにされる。注3

14 事実、すべてあらわにされるものは光である。それゆえ、こう言われている。

起き上がれ、眠れる者よ。

立ち上がれ、死人たちの中から。

さればキリストが汝に光輝くであろう。注4

注1

●「見分ける」「吟味する」と訳された「ドキマゾー」(δοκιμάζω)は、①「聖書を用いて神の意志を探求すること」、②「試験して本物だと証明すること」、③「承認すること」を意味します。ローマ12:2では「わきまえ知る」と訳されています。

●「光の子らしい歩み」は、この世の常識的な基準ではなく、「主に喜ばれることは何か」「主のみこころ」が基準とならなければならなりません。したがって、それは知的に探究される必要があります。

注2

●「暗やみのわざに仲間入りしない」で身を退き、袂を分かち、かつことも、「明るみに出す」ことの消極的表現です。

●「明るみに出す」「反駁する」と訳された「エレグコー」(ἐλέγχω)は「さらけ出す」「(真相を)暴く、非難・叱責する」の意で、幅の広い語彙です。ここでは事実の誤りを論理的に明らかにすることと、反駁することの両義性を持っています。13節でも同じ語彙が使われています。

注3

●「明るみに引き出される」「反駁される」「さらけ出される」と、「光によってあらわにされる」とことは同義。

注4

「目をさます」「起き上がる」と訳された原語は「エゲイロー」(ἐγείρω)。「起き上がる」「立ち上がる」と訳された原語は「アニステーミ」(ἀνίστημι)。いずれも復活用語。「照らす」「輝く」は未来形。